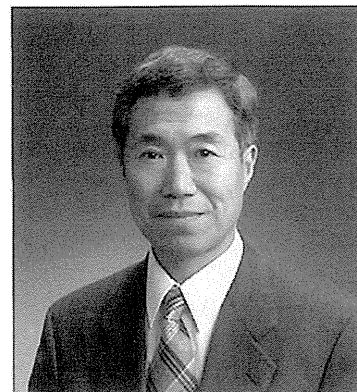


## ◁1999年度会長挨拶▷

「放射光の夢を大いに語ろう」  
—更なる発展に向けて—

日本放射光学会会長

佐藤 繁



新年明けましておめでとうございます。この度おもいがけず日本放射光学会会長に選出されましたことは大変光栄に存じます。しかし一方でこの重責をどのように果たしていったらよいのか考えますとかなりの戸惑いもありますが、微力を尽くす覚悟でありますので会員の皆様のご指導ご鞭撻を心からお願い申し上げます。

日本放射光学会は1988年に設立されてから11年目を迎えることとなります。歴代会長、幹事、会員、事務局の皆様のご努力・ご尽力により、学会は順調に発展を遂げ正会員数は現在1050名（うち学生63名）、賛助会員は59社となっております。歴代会長は放射光施設の責任者の方々が多かったのですが、今回は利用者側から選ばれました。現在、私は大学に勤めておりますが、10年前までは放射光施設の光源側に所属する職員でした。立場や経歴により学会に対するスタンスが違ってきます。これまでの経験を生かし、いままで諸先輩・会員が築き上げてきた基本方針を継承しながら、更に幾分でも学会としての新味を加えることができばと思っております。

冒頭で本学会が順調に発展していると申し上げました。本会が多くの会員を引きつけている理由は、天文学や宇宙物理学における太陽や星からの光のように、電子が発生する放射光にも尽きることのない魅力があるからだと思えます。21サイクルで点滅しながら青白く輝く「電子の光」を私が始めてみたのは、1968年頃東京大学原子核研究所電子シンクロトロン通称SXビームラインで2m斜入射型回折格子分光器の光軸調整をしているときでした。この時受けた表現しがたい強い印象がその後30年放射光科学の分野で仕事をするようになった切っ掛けでした。会員の皆様方が放射光科学をはじめるといっても、実に多種多様のモチベーションがあたりだたと推察いたします。古くて興味深い例ですが、藤原定家の明月記に、天喜二年（1054年）四月中旬非常に明るい星が東の方角に現れ以後約20日間明るく輝き日中も見えた、と記されていることを佐々木泰三先生からお聞きしました。この現象は「かに座」の超新星における熱核反応とシンクロトロン放射によると考えられているそうです。定家は明るい光芒を放つ超新星に随分と強い感銘をうけて記したに違いありません。もし定家が今の世に生きていたならば光の魅力にとりつかれて放射光科学の偉大な開拓者か画期的な利用者として活躍していたかもしれません。

放射光が奥深く幅広い内容をもった魅力的な実体であることは、その発生機構から光源加速器、利用技術、利用研究に至るまでの様々な切り口で、新しい実験研究が世界中で続々と尽きることなく行われていることから明らかです。敢えてこのようなことを述べたのは、会員の皆様方が一般市民や若い世代に放射光科学を語る際には、放射光の実用的な面と共に夢とロマンと引きつけてやまないその魅力を、是非忘れず

に話していただきたいからです。ノーベル賞科学者たちに、今もっともしたいことはと質問すると、異口同音に「子供たちに自分の学問を伝える仕事をしたい」と答えたそうです。私達もそのくらいの気持ちをもってことに当り、学生を含む若い層に「放射光が面白い」とか「夢が持てそう」などと感じてもらうことは、学会の更なる発展のためにも大事なことではないでしょうか。学術講演会などのフォーマルな催し物に加えて、会員の皆様による日常的な啓蒙活動を、是非お願いしたいと思います。

さて本学会はこの十年間、放射光科学を発展させるため、歴代会長のもとで大別して3つのポリシーを堅持し推進してきました。それらは、充実した会誌の発行、年会・合同シンポジウムの強化と国際交流の推進、啓蒙活動による会員数の増加と財政基盤の確立です。この方針は基本的に続けて参ります。

学会誌はA4版になってますます読みやすくなり内容も充実しています。最近は大規模放射光施設が稼働を開始したり、運転を再開したこともあり、どんどん成果が上がっている様です。このような事情を反映して会誌掲載のための原稿が余裕をもって集められるようになりました。右肩上がりの原稿の集まり具合がずっと続くようであれば、学会の経済状態を充分見極めて会誌の年6回発刊を検討する必要があります。

次に学会としての地歩を国内でも国際的にも、より一層確立していく必要があります。国際会議やシンポジウム、フォーラムを積極的に主催して、日本の放射光科学のアクティビティを高め発展に貢献しなければなりません。ここで一つ考えられることは例えば「日本の放射光の将来を探る」シンポジウムの開催です。最近、SPring-8、PF、UV-SORに加えて、広島大、姫路工大、立命館大に於て相次いで放射光施設が稼働し始めました。さらにいくつかの県でも計画を進めています。世界各地でも第3～第4世代型光源が続々と立ち上がりつつあります。このように先鋭化と汎用化が同時進行している環境激変のなかで、我が国の放射光科学や技術の現状を分析し、将来を予測展望することは有意義であると考えられます。すでに稼働している施設については、ビームタイムの有効利用と研究のレベルアップが重要なテーマでしょうし、建設計画については早期実現の方策が問題になります。昨年8月に上坪前会長のご努力により「真空紫外・軟X線放射光施設整備に関する要望書」を文部大臣宛に提出することができましたので、そのフォローも含まれることでしょう。

上述したように、既に幾つかの放射光施設が立ち上がっていますので、多数の新しいユーザーが生じているはずですが。しかし予想したほど本学会への入会者は増えておりません。PR不足だとも思いますので、より充実した学会活動を継続することにより、未参加の方々に本会の有用性を理解していただき入会を促そうと思っております。また企業の研究者にとってもメリットが得られるような仕組みを検討して積極的な参加を求めたいと考えています。一方前会長が示した正会員1500名という目標を達成するためには、日常的な啓蒙活動や学会活動の充実強化とともに、新施設がいくつか実現し全く新しいユーザーが生まれることも必要な気がします。

若手研究者奨励賞は、学会の最重要事業です。より充実させて、名前の示すとおり若い人達に励みをあたえ、研究に弾みを付ける役目を積極的に果たしていきます。また学会がいくら頑張っても立派な将来像を描いても、科学政策に反映させる手段を持たなければ、画に書いた餅で終わります。引き続き、学術会議に委員を送り込み発言の機会を得ることを目標に、努力していきます。

最後になりますが、会員の皆様方の忌憚のないご意見を頼りに将来の方向を探り、21世紀に至るこの2年間を放射光の夢を語りながら精一杯学会の発展のために頑張りたいと考えています。

宜しくお願いたします。